

第22回日本内分泌外科学会報告-「内分泌外科における各科の連携」をテーマに-

第22回日本内分泌外科学会会長
松田公志(関西医科大学泌尿器科教授)



第22回日本内分泌外科学会は、2010年6月11-12日に大阪府豊中市千里ライフサイエンスセンターで、関西医科大学泌尿器科を主管校として開催されました。ご招待した名誉会員の先生方や無料入場の学生、研修医、コメディカルの方々を含めて、総計459名のご参加をいただきました。日本内分泌外科学会は、国際内分泌外科学会の日本支部としての立場があり、甲状腺や膵内分泌腫瘍などを専門とされる内分泌外科医が中心になって運営されてきた学会ですが、その設立の当初から副腎疾患の診療を行う泌尿器科医も多数参加し、ともに学会の発展を支えてきました。さらに、内分泌疾患の特性から、その診断と治療において、内分泌内科医、放射線科医、病理医、さらに基礎医学者との連携が不可欠です。このような観点から、第22回総会のテーマを「内分泌外科における各科の連携」とし、教育講演、特別講演、シンポジウムなどを企画しました。また、特別報告として、出版間近の「甲状腺腫瘍ガイドライン」、全国的研究組織の「MENコンソーシアム」について、詳細なご報告がなされたのは、大変有意義であったと考えます。

内分泌外科・甲状腺外科専門医制度が発足した本学会では、教育体制の整備が急務です。昨年年第21回総会から、教育セミナーが企画され、今回は最終日の午後2時間、入場と退出をチェックする形で本格的なセミナーが行われました。

新たな企画として、ポスター発表から優秀演題7題を選び、ベストプレゼンテーション賞を贈呈しました。会場の関係で会員懇親会をポスターの展示された会場で行いましたので、表彰式も懇親会で行いました。表彰されたポスターを見ながら、議論と懇親が深められたのではないかと思います。

今回は、一般演題、要望演題、シンポジウムで合計177題、特別講演や特別報告など29題、総計206題と過去最多数の演題が発表されました。

前者のうち、甲状腺・副甲状腺関連が82題、副腎関連が73題とほぼ相半ばしており、本学会会員の関心のあり方を表すものと思われます。

今回を機に、これまで以上に多数の泌尿器科医が本学会に参加されることを願っています。

入梅直前の微妙な季節でしたが、幸いに晴天に恵まれ、多数のご参加を得て、活発なご討議をいただくことができました。内分泌外科という横断的分野では、専門科だけの学会とは異なる発想の転換や新たな知識、技術を習得することができるように思います。企画運営にご尽力いただいた高見 博理事長をはじめとする学会関係者各位、ご参加いただいた会員各位、協賛いただいた企業各社に、主催者を代表して心からお礼申し上げます。来年は、第23回学術総会が清水一雄教授(日本医科大学外科)の主催で開催されるとともに、国際内分泌外科学会もわが国で開催されます。本学会のますますの発展を祈念し、第22回日本内分泌外科学会の報告とさせていただきます。



学会賞を授与される筒井英光先生と高見 博理事長



ベストポスター賞受賞者と松田公志会長

懇親会で清水一雄次期会長を囲んで